

# 富士山麓で 完全放牧



ライ麦混播の放牧地

## 静岡県富士宮市、 中島富治さんを訪ねて

近藤 隆

雄大な富士山をバックに近くの山々が、澄みきった青空に高くそびえていたと思えば、一瞬にして濃い霧に覆われ、近くの家々もかすんでしまうといった、ここ静岡県富士宮市は、非常に霧の多い所、日照時間も極めて短い。海拔六五〇〜七〇〇㍎、附近一帯は富士山系の火山灰黒ぼく地帯で、気候、土壌条件に決して恵まれた所ではない。

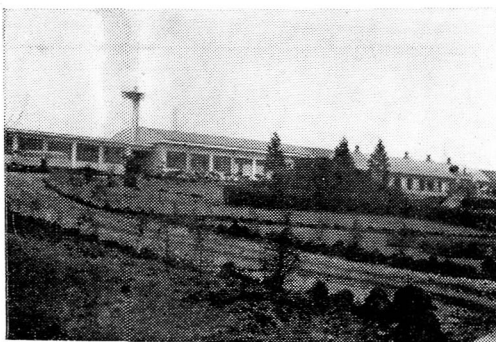
富士宮市から、バスで約一時間、途中、白糸の滝を左手に眺めながら、やがて、先方に近代的な建物が霧の中から現われる。大規模草地改良事業の試験場として、脚光を浴びている静岡県酪農試験場西富士支場である。ここでは、附帯事業として、乳牛の精液採取配布と濃霧地帯における乾草の調製方法（乾燥機による調製）、また一部、栽培試験、肥料試験を実施している外は、主として、草地改良による育成牛放牧場としての経営で、一般酪農家より、生後六ヵ月〜一六ヵ月未満の育成牛を約一〇〇頭を導入し、草地改良事業としての施肥試験、耕起法試験を試みながら、終日放牧による委託育成を実施されている。

この辺一帯は殆ど草地造成が行なわれ、ゆるやかな丘陵とは言え、広々とした緑の

放牧場には、見なれた白黒のホルスタイン牛に代り、褐色のジャージー牛があたりこちに散見され、一見そのコントラストが非常に美しく、そこには、新しい経営に踏切る開拓部落の一端が感じられる。

当初は共同経営

中島さんは昭和二十一年、開拓組合員一〇〇戸と共に当地に入植、酪農経営の第一歩を踏み出した。当初、中島さん兄弟四人による協業経営を試みたが、いわゆる協業は責任の行きどころがはっきりせず、また自己の能力を知るために、更にニユーアイ



静岡県酪農試験場西富士支場全景

デアは直ちに協業では活用できない等々、種々の行きづまりを感じ、中島さんはその後、奥さんと二人で新しい経営に取組んだ。昭和二十八年、当地が県の集約酪農地に指定され、ジャージー牛が導入されてから、本格的に軌道に乗り始めたわけで、今日の経営は中島さん夫妻のなみなみならぬ努力と体験上から割出した理論に基づいた成果と言わなくてはならない。

耕地は牧草地だけ

総面積は一五㍎、その内耕地面積は八・六㍎で、全く牧草一辺倒の単純経営を行ない、省力化に努力が払われている。乳牛はホルスタイン搾乳牛九頭、育成牛一頭、ジャージー搾乳牛一九頭、育成牛一頭の計三〇頭で、自家産の仔牛はすべて販売、搾乳直前の乳牛を購入するといった搾乳牛主体の飼養を行なっている。年間産乳量六〇、〇〇〇㍎、二回搾乳で、良質粗飼料の飽食から、繁殖率も極めて高い成績を納め、空胎は殆ど見られない。省力化のため、必要欠くべからざる農機具類は完備されている。ミルク一台、デンボク一セット、耕耘機（トレラー付）一台、モーター一台で常時使用するもののみ止め、プラウイング、デスクキングやハーローイングなどは県の大農機械による貸借ですべて行なわれている。

新しい試みの完全放牧

当地富士宮開拓組合酪農家二〇〇戸の内一〇〇戸は年間完全放牧を行なっているのが大きな特徴で、我国では初めての試みとして、各方面から注目を集め、日本の酪農に一つの新しい方向を築いたものと思われる

る。

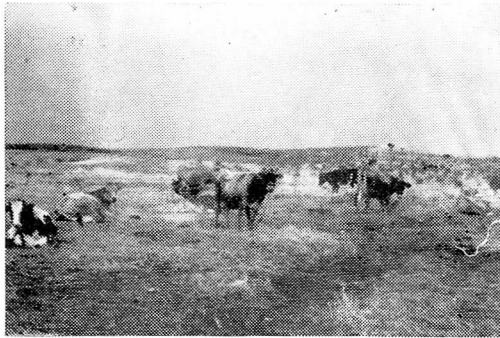
もともと、この終日放牧は自己資金の乏しい開拓者が直接生産に寄与しない畜舎に莫大な経費をかけ、償却費、金利支出に収入の全部が持っていられることに疑問を抱いたことから始められたもので、中島さんがリーダーとなり、当初、試験的に林の中で七頭、終日放牧を実施したが、特別な支障がなく、畜舎なしで、充分飼養する自信を得たので、次年度から草地造成予定の野草地に乳牛を放牧、まずストッキングによる野草の抑圧を徹底的に行ない、その後耕起し、牧草を播種し、漸次放牧地にしながら頭数を増加した。問題となる冬期間も若干飼料の増量と乳量の減少が見られたが、他の舎飼いに比べて見て、収支計算上却って上廻るほどの成績であった。青天畜舎とも言うべき自然の中で飼養すれば、乳牛も自然に馴応し、極めて健康であるとの体験から割出した理論に基づいたこの年間完全放牧に大いに自信を深め、成功を納めている。

### 肥料代は四、四〇〇円

牧草畑八・六畝は前述の通り、殆ど放牧利用に徹底し、二週間ごとの輪換方式をとり、放牧を高度に利用されているが、十二月と三月の冬期間はグラスサイレージとかぶ類の給与を併用している。サイレージ原料は常に放牧地の草生状況を考慮して、牧草の伸び過ぎ時に刈取り、その調製については、予乾後、細断せず埋草し、良質のサイレージを造っている。サイレージは飽食させているが、現在までこれによるケトージス等

の疾病は見られない。またかぶ類は住宅の前にある林間に散播し、逐次抜きとり給与、更に五・六年目ごとに行なわれる牧草畑の更新時の前年夏にかぶ類を散播、十一月一月まで適時抜きとり給与を行ない、極めて効果的に土地を活用されている。乾草は当地の過湿な気候条件から考慮し、調製していない。

中島さんの放牧地はとくに青々として見事に生育している。言うまでもなく、惜しめない施肥によるもので、牧草の増収と肥料とは切り離すことのできないもの、ひいては飼料代の大きな節減となると力説されている。施肥基準は、一〇㏞当たり、元肥で二、二〇〇円、追肥で二、二〇〇円、計四、四〇〇円の肥料代を見込んでおり、その内訳は元肥として、複合成九〇キ、追肥として、採草地には刈取後尿素八キ、加里一



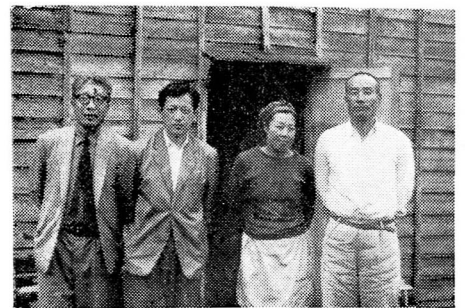
未墾地に乳牛放牧 ここも間もなく草地化される

二・一五キ、放牧地には、月一回尿素八キ、加里二・一五キを施肥、磷酸肥料は夏期をさけ、早春と晩秋に施肥している。このような不良条件下の地帯で見事な牧草の生育を見せているのは、中島さんの卓越した施肥技術の成果であって、施肥による効果が歴然としている。牧草の品種は、オーチャードグラス一・五キ、ラデノクローバー一・五キ、イタリアンライグラス一・〇キ、赤クローバー一・〇キ、それにライ麦七・五キを混播し、これで一〇㏞当たり、平均二一、〇〇〇キの収量をあげている。ライ麦の混播については、後述するが、中島さんの新しい試みの一つでもある。

### 牧草地へのライ麦追播法

早春、牧草のまだ良く伸びない時期、真夏期の牧草の衰弱する時期、初冬の端境期は、酪農家にとって、青草の確保に頭を悩ますものである。中島さんはこの対策として、独自の工夫のあとが各所で見られる。春、牧草を追い抜いて見事に生育しているライ麦の混播の放牧地も中島さんが考え出した栽培法で、早春の飼料確保に大きな働きをなしている。三年前から、ライ麦の混播法について、色々試験されたが、最終的には秋にデスクハローで軽くデスクキングし、ライ麦を散播する方法が最も成績が良く、まず初冬に一回刈、翌春、よく生育したライ麦主体の放牧地に放牧、或いは二・三回刈取給与し、その後、伸長して来た牧草地に放牧するという誠に無駄のない栽培利用を行なっている。夏期、牧草の衰弱する時期には、現在ひえの混播を行なっている。

が、未だ試験段階で更に夏作牧草の品種選定に研究を続けられている。



右中島さん夫妻 左から二番目酪農試験場西富士支場川村技師 左隣社安孫子千葉農場長

目標は三二〇万円

中島さんの経営内容を見ると、昨年の牛乳代は二五二万円、収益率は三〇%、飼料代は乳代の五五%である。

最後に中島さんの抱負をお聞きしよう。

「理論はともかく、私は私の経営には、すべて体験から得た成績を基礎にして押し進めている。私の体験から、二〇㏞で一頭の完全自給の可能性も見出し、これにより乳牛頭数を七〇頭にまで飼養することができよう。乳代について言えば、三二〇万円を私の第一次目標としております。」

本記事取材に当たって、酪農試験場西富士支場の御協力のもとより、御尽力いただいた向山技師、川村技師並びに御多忙の所、色々御欲待いただいた中島さん御夫妻に厚く御礼申し上げます。

(東京支店)